

ケイソウの用字について

津村孝平

従来ケイソウ diatom, Kieselalge と書くのに珩藻と書く人と珪藻と書く人があり、これは人によつてそのいづれかに一定させている人と、一定させずにその時の調子で、いづれとも一定していない人もあり、甚だしいのには同一文中に珩藻と珪藻とを混用している人もいる。また原稿にはその人によつて一定の字を用いていても、編集者が勝手に変えてしまつた例もある。

筆者は戦前には珩藻に一定させていたつもりだが、某公刊雑誌にだけ編集者が珪藻としてしまつた例が一つあつた。本誌にも Vol. I, no. 2 に根来健一郎氏が珩藻と書いているかと思うと、同じ号に瀬木紀男氏が珪藻と書いているし、そうかと思つて Vol. I, no. 1 を見ると広瀬弘幸氏が珩藻と書いている。

古い例では遠藤吉三郎博士の「浮游性珩藻類報告」(水産調査報告 Vol. XIV, no. 2, 1905) があり、また岡村金太郎博士の「本邦産沿岸性珩藻類一斑」(水産講習所試験報告 Vol. VII, no. 4, 1911) というのがあり、この二つの間にも名倉氏、椎原氏、徳久氏の報告や論文は珩藻となつている。また赤塚孝三氏の「高島近海における浮游珩藻」(水産調査報文 no. 8, 1914) というのもあるかと思うと、奥野春雄氏の「日本珪藻土礦床産化石珪藻図譜」(1952) というものもある。

テングサの繁殖法やアラメとカヂメの名について、あれほどの議論をした遠藤博士と岡村博士では、どちらも古文書の引用など実に徹底して居られたのであるから、ケイソウのケイ字も、もし両先生の使い方が違つたのであつたら、ひとわり係争(ケイソウ)はまぬがれなかつたのもあろうが、幸か不幸かこれは珩藻に一致していた。

それで安心したというわけでもないが、どうも筆者がケイソウに興味を持ち初めた昭和4~5年頃には、こうした論文はたいがい珩藻としてあつたので、特別の理由がない限りはその習慣に従つた方がよからうと考えて珩藻と書くことにきめていたのである。筆者は岡村博士には先生のお宅で、いろいろ文献を見せて頂いたり、お教へも私的に受けたりしたことがあるので、本誌 Vol. II, no. 2 の岡村先生の思い出についての文を読むと、また別の意

味で思いで深いものもあるが、ケイソウのケイ字について一度お伺いしようと思つていながらついその機会がない中に御他界遊ばされたのであつた。

ところが戦時中に学界ではまだほとんど知られていない珪藻土の産地があつたので、その調査をしたときに、地質とか岩石などの方面の文献を調べて見ると、これはまた珪藻と書いたものが非常に多いので、このままにして置くと将来ますます混用するから、何とかして一定させたいものと思つたけれども、そうなると何か理屈に合つた根拠がなければ主張ができないので、この調査を徹底的にやつてみた。その結果筆者は戦時中(昭和17年と思う)から、珪藻と書くのが正しいという結論を得たので、このことは、ある小会合の席上で口演して置いたが、いまその要旨を書いて参考に供する。

先ず字書による調査として普通に用いられる古典では康熙字典および玉篇があるが、珪藻は1703年の *Philosophical Transaction* に Plate I, fig. 8 として LEENWENHOEK が *Synedra ulna* らしいものを書いたのが最も古いといわれているから、康熙字典などにケイソウなどの用字があるはずがないことはわかっているけれども、もしやケイ石などというような用例があるかも知れないと思つて調査したけれども、これは全然何の手がかりも得られなかつた。

隣邦の中国ではケイソウのことを何といつているかという、方賓観ほか49名の合著「辞源」によれば

珪素 矽日本謂之珪素矽字注。

硅 読如圭。即矽詳矽字注。

とある。よつてその項を参照すると

矽 Silicon 読如夕。一名珪素。非金属原質之一。(以下略す)

矽藻 Diatomaceae 矽藻為一個細胞所成。(中略)……矽日本記為硅。

故亦硅藻。

矽石 Silica 即天産之二養化。矽石英……(以下略す)

矽藻土 Diatomaceous earth (説明略す)

以上を要約すると中国では日本のケイ素、ケイ酸、ケイ石、ケイ藻などのケイに当る字は矽であるが、日本で珪素などという熟字があるために中国にも珪素という用法もあり、中国では diatom を矽藻というが日本に硅藻という熟字があるため硅藻もまた用いられていると解される。すなわちケイ素、ケイ酸、ケイ石、ケイ藻などという語は中国でも使われるが、それは日本か

ら逆輸入したものと思われる。しかしケイ素の場合は珪素とし、ケイ藻の場合は珪藻としている。日本でも混用されていたとはいうもののケイ素の場合は珪、ケイ藻の場合は珪を用いた事例（傾向）が多分にあつたことは、すでに遠藤、岡村その他の諸氏の用例に明らかである。

それでこの解決は日本の文献に求めなければならないことがわかるが、日本の字書ではこれが実に一定していない。読者もお手許の字書を2~3冊調べてみればよくわかると思う。甚だしい不見識は、同一の辞書中に見出し語や説明や挿図の題に珪・珪を混用しているものもある。だからそんなものは参考にならない。ここにはつぎの2書を引用する。

上田万年：大字典によれば

珪 カク、キョウなどと読む。なお「我国ニテハけいと読ミ珪素ノ義トス」とあり、それぞれの例が上げてある。なお珪の項は康熙字典などの説明と大同小異であつて、この問題には無関係であるから略す。

久保天随：漢和大字典によれば

珪 康熙字典などと大体同じであるが、付記として「珪石、珪酸ナドト書クベキヲ、珪石、珪酸ナドト書クハ誤リ」なることを明記している。但し理由が明瞭でない。なお珪の項は康熙字典などと大体同様でこの問題に関係がないから略す。

この両字書ともに明白な根拠を示していないから、これだけでは水掛論である。その他の字書類は大概是調べたが、特にことわりがきをしてあるものは見当らず、珪を用いたものも、珪を用いたものもある。

筆者は戦災を受けてしまったので、戦前の蔵書や標本やノートの類を全部焼失してしまつて、いまその論著を持つていないから、執筆者名や標題がわからないが、満洲事変以後に満洲の礦物資源を調査した日本人で、満洲の珪藻土産地の調査報告を多分窯業方面の雑誌へ書いたのがあつたが、その脚註に「珪藻と書くのが正しい」と書いてあるのを見たことがあるが、理由や出典が示されていなかつた。こういう言いかたならば珪が正しいと書くこともできるから、これだけでは決定はできない。これは多分、久保氏の漢和大字典を見て書いただけのものであろう。ものごとはそう簡単には断定すべきではない。結局これはケイ素などの用例を作つた最初の文献を調査するよりほかに方法がないことがわかる。そして筆者は広くその方面の文献を調査して、つぎの書物に到達した。

宇田川裕庵：舎密開宗 (天保 10 年)

舎密とはセミイと読み *Chemie* の意味である。この書物の初めの方に元素の名が挙げてある。その中にはケイ素という語はなく、悉里叟母というのがあつて、カナがつけてある。シリシウムはもちろん *Silicium* でケイ素のことである。しかし本文中に化学物質や反応の説明などに入つてから「珪瑠」という語が使われていて、カナがつけてある。ここにはケイセルのルをカナで示したが原文はこれも漢字である。筆者はそのときのノートを焼失して、いまこの漢字が記憶にないので、カナでルとしたことをことわつておく。ケイセルはドイツ語の *Kiesel* か、オランダ語の *keis* などから、宇田川氏が日本字をアテ字したものであることは明らかであつて、しかも「珪」を用いていることに注目すべきである。さらにこの書よりも 1~2 年後に出た同人の著書に、つぎのものがある。

宇田川裕庵：植学啓源

植学とは現在の植物学のことで、この書物の中では植物を単に「植」、動物を単に「動」、動物学を「動学」と書いている。この書物にはシリシウムにむづかしい漢字を当てたりせずに「珪素」という字が用いてある。

以上のことから、ケイ藻の由来したケイ酸、そのさらに元のケイ素に珪を用いたのが最初であるから、たとえ当て字であつてもこれに先主権があるといつてよい。よつて珪藻と書くのが正しいと結論した。

ついでに珪藻などの藻は現在の *Alga* でよいことは論ずるまでもないことと思うが、新井白石は「浮く者は蘋、沈む者は藻」と書いているから、昔は沈水植物を指したのではないかと思われる。藻字を用いた最古の文は五経中の詩経の召南の章に「采蘋」という詩であつて、つつましい乙女が水辺から蘋 (ウキクサの類) や藻を取つて来て、ゆでて祖先の祭壇に供えることを賞さんした中に使つてある。

なお以上の中で、字書の説明などの引用が原文と全く同じでなく、多少変つているところがあるかも知れない。それは筆者が戦災を受けて当時の記録用のノートやその他の資料を焼失し、その後再調査せずに記憶によつて書いたためであるが、要点は上記の通りである。

(横濱市立大學生物学教室)